

杉田 健太郎



『第三帝国』（白水社、2016年）

著 ロベルト・ボラーニョ

訳 柳原 孝敦

生々しいボラーニョ

ロベルト・ボラーニョの作品を少しでも読んだことがある人ならば、第三帝国という言葉を見て、すぐにある種の納得というか、いかにもボラーニョらしいタイトルであるという一種の感慨を覚えるのではないだろうか。第三帝国、ナチスドイツ……ボラーニョが世に出るきっかけとなった『アメリカ大陸のナチ文学』を始め、大長編『2666』の鍵となる人物、アルチンボルディがナチの生き残りであるなど、ボラーニョはナチを繰り返し小説の題材に選んできた。が、本書『第三帝国』は少しだけそんなボラーニョ読者の意表をつく。なぜなら「第三帝国」とはただのボードゲーム、戦争ゲームの名前であるからだ。

この物語はドイツ人の若者ウド・ベルガーがスペインのコスタ・ブラバに恋人のインゲボルクと休暇で訪れたところから始める。ウドは会社勤めの傍らボードゲームを愛好し、ことに戦争ゲーム「第三帝国」のドイツチャンピオンでもある。休暇中、チャンピオンとしてとある雑誌へ「第三帝国」の新戦術に関する記事を寄稿しなければならないウドであるが、なかなか進まない。そんな折、友人コンラートの勧めで始めた日記という体裁をもって、本書『第三帝国』は描かれる。

当初、ウドの休暇はなかなか充実したものだった。ホテル支配人の妻フラウ・エルゼに怪しい思いを抱きつつも、恋人インゲボルクとの関係は良好で、コスタ・ブラバで知り合ったカップル、チャーリー、ハンナと連れ立ってディスコへ繰り出して遊んだり、現地人の「狼」や「羊」と行動を共にし飲み歩く。しかし、ウドは寄稿しなければならないゲーム「第三帝国」のことが頭から離れず、徐々に彼らとの間に距離が生まれる。そんな折、チャーリーが行方不明になるという事件が起き、ウドはインゲボルクを先に帰国させ、自らはチャーリーの遺体を確認するという名目でスペインの地に留まることを決意する。

だが、時を同じくして、ウドが没頭する「第三帝国」を巡っても大きな変化が訪れる。「火傷」だ。ビーチでツインボートの貸し出しを行う、全身に火傷痕があるこの不気味な男は、ウドの話す「第三帝国」に異様な食いつきを見せる。自分自身との対戦に辟易していたウドはこの「火傷」に「第三帝国」の相手を務めさせることを思いつく。当然ながら当初ウドの圧勝に思われたその試合であるが、徐々に組織だった戦略を見せ始める「火傷」を前に、ウドはどんどん追い詰められていく。

物語のプロットを辿るならば、この小説は非常に単純だ。若き青年が休暇にきて、道ならぬ恋をし、ゲームで変な男に追い詰められていく、ただそれだけの話だ。が、そこはボラーニョ、この小説をひとたび読みだしたならば、どこか得体のしれない恐怖に、ボラーニョ・ワールドにど

んどん読者は引き込まれていく。それはまさにこの小説の奥底に見え隠れする危険な闇、本書解説でも触れられている濃厚な「死」の香りなのかもしれない。

この小説の出版経緯はボラーニョ作品の中でもかなり異質だ。『第三帝国』はボラーニョの死後、彼の遺稿から見つかった作品だ。1989年に手書きで執筆されているが、発見されたのは2010年であり、死後出版という形になる。すなわち、本書は一応原稿として完成はしているけれども、まだまだ手直しされる余地が残された作品ということだ。実際、この作品全体の文章やリズムなども、後の他作品と比べるとどこか冷徹な、抑制された印象を受ける。このような生前彼が未発表だった作品を出版することに関して、ボラーニョの名声が高まったことにより生じた利権に群がる墓堀のようだという批判が上がらなかったといえは嘘になるが、この『第三帝国』が小説家ボラーニョとして初期の作品であり、後のボラーニョ作品に通底する重要な萌芽をいくつも見い出せる非常に興味深い一作であるということは否定できない。

その一端に触れてみよう。例えばタイトルにもなっている「第三帝国」。ウドがこのいわゆる「オタク」っぽい戦争ゲーム愛好家であるように、ボラーニョは時代遅れであったり、中心からどこか外れた人々、いわば「周縁的な人物たち (personajes periféricos)」に対する強い偏愛をしばしばのぞかせる。例えば『鼻持ちならないガウチョ』の主人公ペレーダは時代遅れのガウチョ狂いであるし、若きボラーニョの自伝的な要素を多分に含んだ『野生の探偵たち』の主人公たちが属しているのは「はらわたリアリズム」という文学史から抹消された集団である。こうした周縁的なもの、アウトローなものに対するボラーニョの強い愛着は、青年時代「インフラレアリスモ」という文学運動をおこしたボラーニョ自身の経験の結晶であり、彼の文学における大きな主題となる。訳者あとがきで柳原孝敦が指摘している通り、1989年、ボラーニョが売れる前に書かれたこの小説は、まさにそうした「ボラーニョの体験がいたるところにちりばめられた」作品であると言えるだろう。それも、どこか生々しく、随所に。このことは、『売女の人殺し』の解説、若島正の言葉を借りるなら、常に「文学の裏側から語る」ボラーニョの根幹が見て取れると言って良いのかもしれない。

また、『第三帝国』の鍵となる人物、「火傷」の存在を見過ごすことはできない。短編集『通話』の一篇「芋虫」の男がちらつかせるナイフのように、ボラーニョの作品にはしばしばこうした暴力の臭いを強烈に感じさせる謎めいた男が登場する。「火傷」はまさにこうした男の一人と言えるだろう。彼の出自は明らかにされていないが、作中ではラテンアメリカ出身であること、それも凄惨な拷問を受けた生き残りであることなどが示唆される。とりわけ、印象的なのが本書の9月11日の日記だ。普段から気味の悪い「火傷」の動きだが、この日はいつにもましてウドの目に留まる。そして上空のセスナが空に書こうとした文字が掻き消えてしまった「そのとき、とてつもない憂鬱に腹を、脊椎を、一番下の肋骨をしめつけられ、僕はパラソルの下にしゃがみこんでしまった」(249)のだ。9月11日はカタルーニャの日と作中で明記されているが、9・11、今でこそニューヨークでの同時多発テロの日と覚えられているものの、ラテンアメリカで9月11日と言えば、それはチリで軍事クーデターがあった日にほかならない。セスナ機が文字を書くが消えてしまうその描写は、後の『ナチ文学』や『はるかな星』で中心的な人物となるカルロス・ビーダー(ラミレス・ホフマン)のことをなんとも彷彿とさせるではないか。では、「火傷」は軍事クーデターを生き延びたチリ人なのか? いや、それはわからない。あくまで謎のままであり、「火傷」

という人物は底知れぬ暴力性を含んだ不気味な謎として、ウドの前に、そして読者の前に居座り続けるのである。

このようにボラーニョ作品における数々の関連性や萌芽を『第三帝国』では見出すことができる。だが、この小説を読むうえでさらに一つ付け加えておきたい。都甲幸治による『第三帝国』の解説が「死の帝国」であるように、ボラーニョ作品の多くは「暴力」や「死」といったテーマで語られることが多い。研究者のマンソニなどはボラーニョの作品を現代思想を取り入れて読み解き、ボラーニョは小説家が呼応しなければならない倫理的な立場に立っているとしている。それはもちろん間違っていない。しかし、それと同時に私がとても重要だと感じることは、ラテンアメリカの若者たちがしばしば強くボラーニョへの共感を示しているということだ。私は実際にチリ人の若手研究者と交流をもっているが、その際何度か、ボラーニョ作品の登場人物に対し、強い共感を抱くという言葉を目にした。それは本作『第三帝国』も例外ではない。この作品のウド・ベルガーはドイツ人である。しかし、ウドという人物から描かれる世界は〈ドイツ人〉から描かれる世界というより、むしろ自らの才能に自信を持ちつつも不安に揺れ動く青年の目から見た世界であり、国境を越え若者の共感を強く揺り動かす人物なのだ。これは、若き日のボラーニョの体験がボラーニョ作品に彼の想いととも散りばめられた結果なのだと、私は考えている。

そう考えるならば、本書は非常に興味深い。『第三帝国』は、ボラーニョがいわば「スター」になる前の作品、実際には世に出ることのなかった作品であり、それだけにある意味もっとも生々しくボラーニョを感じられる作品であると言えるかもしれないからだ。だからこそ、『第三帝国』はとりわけボラーニョ作品を読んだことのある人に薦めたい。『第三帝国』は非常に読みやすく、ボラーニョの入門書としても適しているが、同時に後の作品に至る萌芽を多分に含みつつ、どこかより生々しいボラーニョ・ワールドを体験できる一冊でもあるのだ。

参考文献

- Bolaño, Roberto. *Los detectives salvajes*. Barcelona: Editorial Anagrama, 1998. (柳原孝敦訳・松本健二『野生の探偵たち』(上・下) 白水社、2010年)
- . *Llamadas telefónicas*. Barcelona: Editorial Anagrama, 2002. (松本健二訳『通話』白水社、2009年)
- . *2666*. Barcelona: Editorial Anagrama, 2004. (野谷文昭・内田兆史・久野量一訳『2666』白水社、2012年)
- . *La literatura nazi en América*. Barcelona: Editorial Seix Barral, 2005a. (野谷文昭訳『アメリカ大陸のナチ文学』白水社、2015)
- . *Putas asesinas*. Barcelona: Editorial Anagrama, 2005b. (松本健二訳『売女の人殺し』白水社、2012年)
- . *EL gaucho infrible*. Barcelona: Editorial Anagrama, 2008. (久野量一訳『鼻持ちならないガウチョ』白水社、2014年)
- . ed. Echevarría, Ignacio. *Entre paréntesis*. Barcelona: Editorial Anagrama, 2009.
- . *El Tercer Reich*. Barcelona: Editorial Anagrama, 2010. (柳原孝敦訳『第三帝国』白水社、2016年)
- Braithwaite, Andrés (selección y edición). *Bolaño por sí mismo*. Santiago de Chile: Editorial Universidad Diego Portales, 2006.
- 仁平ふくみ。「双子の誕生—ロベルト・ボラーニョ『アメリカ大陸のナチス文学』と『遠い星』—」『れにくさ』第三号、東京大学大学院人文社会系研究家・文学部現代文芸論研究室編、2011年。